

# 診断と検査 —小児—

聖マリアンナ医科大学小児科学教室

今泉 太一, 宮本 雄策, 山本 仁

## KEY WORDS

- てんかん
- 診断
- 小児

## はじめに

てんかんとは、種々の成因によってもたらされる慢性の脳障害であり、大脳ニューロンの過剰な電気発射から由来する反復性の発作(てんかん発作)を主徴とする。従来、てんかん発作は突然に起こり、普通とは異なる身体症状や意識、運動および感覚の変化などが生じる。乳幼児から成人・老年に至る全年齢層に及ぶ神経疾患であるが、特に小児期に多く発症する。疫学調査では13歳未満の小児におけるてんかんの有病率は1,000人あたり8.9人と推定されている<sup>1)</sup>。てんかんは小児科としてはcommon diseaseであるが、診断は必ずしも容易ではない。本稿では小児てんかんの診断・検査について解説する。

## I. てんかんを疑う症状

てんかんを疑う症状としては、けいれんと意識障害が最も一般的である。

そもそも“けいれん”とは広い運動現象を意味し、全身あるいは一部の筋群の不随意性収縮である。異常興奮を起こす部位は中枢神経系でも末梢神経・筋のどの部分でもよく、その発症機序は問題にしていない。本稿では、けいれんを中枢神経系の異常興奮によるもの(英語でいうconvulsion)として解説する。

はじめに、けいれんや意識障害などの症状が、重篤な病態に起因するの可否かを区別することが重要である。重篤な病態としては、中枢神経感染症、脳炎・脳症、代謝疾患、外傷などがあり、緊急治療が必要であることが多い。また小児ではけいれんを1日に何度も繰り返しても、発熱や嘔吐下痢症状があれば熱性けいれんや胃腸炎関連けいれんの可能性が考えられる。表1<sup>2)</sup>に示したこれらの疾患はてんかんとは区別される。つまり、身体や脳が重篤な状態ではなく、一般的には(状況関連性発作の誘因とされる)特定の機会に

Diagnosis and examinations of epilepsy in children.

Taichi Imaizumi (診療助手)  
Yusaku Miyamoto (講師)  
Hitoshi Yamamoto (教授)